

まず兄弟と仲直りを

マタイの福音書 5章 21-26 節

はじめに

私がウェルカム・サンデーで説教をする時は、マタイの福音書 5-7 章に書かれているイエス様の説教からお話ししています。この説教は、山の上から語られたので、「山上の説教」と呼ばれています。

イエス様は今日の聖書箇所で、「十戒」の第六戒の「殺してはならない」という律法について教えています。

1. 心の思いと言葉による殺人

21-22 節で、イエス様はこう言われます。「昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます」。

イエス様はここで、「殺してはならない」という律法は、「行為」だけの問題ではない、「心の思い」や「言葉」の問題でもあると教えています。つまり実際に人を殺さなくても、心の中で誰かに「怒り」「腹を立て」れば裁きを受けなければならない、また言葉で誰かに「ばか者」「愚か者」と言えば裁きを受けなければならないと言うのです。

確かに現代社会のいじめやハラスメントや虐待の問題を見ると、たとえ暴力や凶器を使わなくても、「言葉」や「心の思い」だけで、人を死に追いやることができるということが分かります。友達から悪口や陰口を言われたり、SNSで悪質な書き込みをされたり、上司や夫や親から無能だ、価値がないなどと言われ続けて、自らの命を絶つ人は少なくありません。また言葉にされなくても、存在を無視されたり、関心を全く示されないことでも人は心を病み、自らの命を絶つこともあります。

殺人は、「行為」だけの問題ではなく、「心の思い」や「言葉」の問題でもあるということは、現代社会の問題を見てもお分かりいただけると思います。

私たちが生きている社会の法律は、実際に行なった「行為」を罪に定め、裁きますけれども、「心の中の思い」までを罪に定め、裁くことはしません。しかし神様の律法は、私たちの「心の中の思い」や「言葉」までも罪に定め、裁かれるのです。旧約聖書には、「**人はうわべを見るが、主は心を見る**」(サムエル 16:7)という言葉があります。神様は、目に見える外側のものではなく、目に見えない内側のもを見られる方なのです。神様は、私たちの「心」

を問題にされるのです。

イエス様はある時、こう言われました。「**内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです**」(マルコ 7:21-23)。イエス様は、「殺人」は心の中から出て来る、また「ののしり」などの言葉の殺人も、心の中から出て来ると言われます。私たち人間は、「心」が変わらなければ、「言葉」も「行い」も変わらないのです。私たちが問題にすべきなのは、目に見える外側のものではなく、目に見えない内側のものなのです。

私たち人間には、目に見える外側のものしか見えません。ですから目に見える外側のものを整えることは一生懸命になりますけれども、目に見えない内側のものは疎かになりがちです。しかし神様は、私たちの内側、つまり私たちの「心」を見られる方です。そして私たちの「心」をも裁かれる方です。そうであるならば、私たちは目に見える外側のものだけでなく、目に見えない内側のもの、「心」としっかりと向き合っていかなければなりません。

2. 礼拝の前に、まず兄弟と仲直りを

私たちは、礼拝においても、目に見える外側のものだけでなく、目に見えない内側のものを整えていかなければなりません。そのことを教えるためにイエス様は、23-24 節でこう言われます。「**ですから、祭壇の上にささげ物を献げようとしているときに、兄弟が自分を恨んでいることを思い出したなら、ささげ物はそこに、祭壇の前に置き、行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから戻って、そのささげ物を献げなさい**」。

イエス様はここでも、目に見える外側のものよりもまず、目に見えない内側のもの、「心」を整えるようにと教えています。目に見えるささげ物は立派でも、人間関係の問題を抱えていたら意味がないと言われるのです。イスラエルの王であったダビデは、こう言っています。「**まことに、私が供えても、あなたはいけにえを喜ばれず、全焼のささげ物を望まれません。神へのいけにえは、砕かれた霊。打たれ、砕かれた心。神よ、あなたはそれを蔑まれません**」(詩篇 51:16-17)。神様が喜ばれるささげ物は、目に見えるささげ物よりも、私たちの「心」です。しかも神様の前に自分の罪を認めて、悔い改める心です。その「心」を、神様はどんなささげ物よりも喜ばれ、求めておられるのです。

ですから私たちの礼拝では、「罪の告白」があるのです。私たちのささげる「賛美」がどんなに美しても、私たちのささげる「祈り」がどんなに信仰深くても、私たちのささげる「献金」がどんなに高額でも、私たちの「心」が神様の前にへりくだり、自分の罪を認めて悔い改めていなければ、意味がないのです。だからこそ礼拝には、「罪の告白」が必要なのです。

イエス様は、「兄弟が自分を恨んでいることを思い出したら」と言われました。ここでは、「逆恨み」など、自分は何も悪いことをしていないのに一方的に人から恨まれていることを想定しているわけではありません。そうではなく、自分が人に悪いことをして、それをそのまま放っておいて、人に恨まれている場合です。人に対する自分の罪をそのまま放っておい

て、神様の前に出てはいけないということです。

使徒ヨハネはこう言いました。「**神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は兄弟も愛すべきです**」(ヨハネ 4:20-21)。礼拝は、神様への愛を表すものです。神様への愛は、人への愛によって諮られます。目の前の人を愛していない人には、目に見えない神様を愛することはできないのです。目の前の人を愛してこそ、目に見えない神様を愛することができるのです。ですから人間関係の問題を抱えながら、神様を礼拝することは矛盾しているのです。私たちは、自分の罪を認めて人と仲直りをしてこそ、神様を真実に愛する礼拝をささげることができるのです。

3. 訴える人と早く和解しなさい

しかしそうであっても、私たちはなかなか自分の罪を認めて、自分から人と仲直りをするのができず、ズルズルと先延ばしにしています。そんな私たちに向けて、イエス様は25-26節でこう言われます。「**あなたを訴える人とは、一緒に行く途中で早く和解しなさい。そうでないと、訴える人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれることになります。まことに、あなたに言います。最後の一コドラントを支払うまで、そこから決して出ることはできません**」。

ここでは「裁判」が想定されています。自分の罪を認めず、人と和解することを先延ばしにしていると、「裁判」に持ち込まれ、そこで有罪とされ、牢獄に入れられてしまう、だからそうなる前に、しっかりと自分の罪を認めて人と和解しなさいと言われていています。

私たち人間は誰でも、死後に神様から裁きを受けます。また世の終わりに、イエス様による「最後の審判」があります。私たち人間は誰でも、その裁きの日に向かって歩いているのです。一日一日、確実にその裁きの日は近づいているのです。その裁きが来る前に、しっかりと自分の罪を認めて人と和解するようと言われていたのです。

私たちは、毎週の礼拝が、人と和解する一つのきっかけです。しかしそれと同時に、私たちの死後の裁きが、また「最後の審判」が、人と和解するもう一つのきっかけなのです。私たちの死は、いつ訪れるか分かりません。また私たちが罪を犯して私たちが恨んでいる人の死も、いつ訪れるか分かりません。私たちの命は、神様の御手の中にあります。またイエス様が再び来られる「最後の審判」も、いつ訪れるか分かりません。ですから私たちは、先延ばしにせず、できるだけ早く人と和解すべきなのです。

おわりに

「殺してはならない」という律法は、ただ単に「行い」の問題だけでなく、「言葉」や「心」の問題でもあります。私たちの「心」を見られる神様の前では、「行い」による殺人だけでなく、「言葉」による殺人、「心」による殺人さえもあるのです。そして「行い」による殺人、「言葉」による殺人は、私たちの「心」の中から生まれるのです。私たちは目に見える外側

のものを整えるだけでなく、目に見えない内側のもの、「心」を整えなければなりません。

「殺してはならない」という律法はまた、人と自分から仲直りする戒め、人と自分から和解する戒めでもあります。人を殺さなければよい、人を傷つけなければよいというわけではありません。もっと積極的に、人と良い関係を築くこと、人との間に平和を保つことが求められているのです。自分の罪を認めず、人と仲直りせず、人と和解せずにそのまま放っておくこともまた、「殺してはならない」という律法を破ることになるのです。

私たちは、人との和解だけでなく、神様との和解も考えなければなりません。私たちの「心」を見られる神様の前では、この「殺してはならない」という律法を一つとっても、罪を犯していないとは言えない者です。その意味では、私たちは神様に恨まれ、訴えられている状態と言えます。そして私たちの死後の裁きは、また「最後の審判」は、確実に近づいているのです。

しかし神様は、神様の方から私たちに和解を求めておられます。私たちが神様に対して罪を犯し、神様が私たちを恨み、訴えているにも関わらず、神様の方が私たちに和解を求めておられるのです。神様は、御自身のひとり子イエス様をこの世に遣わし、私たちの代わりにイエス様を裁かれました。イエス様が私たちの罪の身代わりに十字架で神様に裁かれ、私たちの罪をすべて償ってくださったのです。私たちが支払うべき「最後のコドラント」まですべて支払ってくださったのです。

ですから使徒パウロはこのように言っています。「**ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい**」(IIコリント 5:20「新改訳第三版」)。神様は私たちに和解を求めておられます。私たちは、自分の罪を認めて悔い改め、私たちの罪をすべて償ってくださったイエス様を神の子、救い主と信じて、神様との和解を受け入れるべきです。「死後の裁き」が来る前に、「最後の審判」が来る前に、その日はいつ来るか分からないので、できるだけ早く神様の和解を受け入れるべきです。

私たちは今、自分の心と向き合わなければなりません。私たちは、誰かと和解しなければならない関係はあるでしょうか。神様とでしょうか。それとも家族や友人でしょうか。毎週の礼拝の時は、それを見つめる良い機会です。また自分の死や「最後の審判」も、それを見つめる良い機会です。どうか先延ばしにせず、できるだけ早く関係の回復に取り組んでいきましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは目に見える外側のものにばかり心を奪われて、目に見えない内側のものを疎かにしがちです。しかし神様は、私たちの「心」を見られる方です。私たちは、「心」が変わらなければ、私たちの「言葉」も「行い」も変わりません。

私たちの「心」は、神様あなたにしか変えられません。私たちは、自分の力では「心」を変えられません。どうか私たちが、あなたとの和解を受け入れ、あなたと共に歩めますよう

に。そしてあなたの助けによって、壊れた人間関係も回復していくことができますように。
この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。